

歴史と文化が薫るまちづくり事業計画骨子（案）

平成23年10月

滑川市

目 次

1	歴史と文化が薫るまちづくり事業モデル地域への提案	1
2	モデル地域のエリア	1
3	モデル地域内に存在する地域資源	2
4	地域資源の連携についての方向性	9
5	歴史と文化が薫るまちをつくる役者たち	9

1 歴史と文化が薫るまちづくり事業モデル地域への提案

モデル地域は、かつて都市機能の集積を通じて経済活動の中心であり、滑川市の文化や伝統を培い市の「顔」としての役割を担ってきた。16世紀初頭には大町が、同後期には狭町（瀬羽町）が成立していたことを示す史料が残っており、この頃に滑川町の街並の前身が形成されていたと考えられる。慶長20年（1615）、加賀藩が宿駅に指定し、寛永4年（1627）には大町の桐沢家が御旅屋（おたや）に定められるなど江戸時代を通じて宿場町・物資の集積地としても栄えていた。また、明治時代には郡役所が設置され、中新川郡の政治・経済・商業の中心地として繁栄した。

しかし、近年では、商業機能をはじめとする各種都市機能の衰退が進み、経済活動や社会活動の停滞を招いている。一方で、滑川の商業の歴史とともに歩んだ旧宮崎酒造が民間の手によって再生され国登録有形文化財に登録されるなど、地域のまちづくりに対する関心が着実に高まりを見せているところである。

そこで、本事業により、地域の歴史・文化や地場産業ならびに各種施設などの様々な地域資源を活かし、市内外の活発な交流や連携による地域の魅力向上や産業の活性化を図るものである。

2 モデル地域のエリア


魚舩から中川原にかけての旧北陸街道沿い及び晒屋通り周辺一帯



江戸時代の宿場町、明治から昭和期にかけては滑川町及び中新川郡の政治・経済・商業の中心地を含む地域である。



3 モデル地域内に所在する地域資源

【天然記念物】

	<p>《ホタルイカ群遊海面》…国特別天然記念物</p> <p>ホタルイカが産卵のためにやってくる富山市水橋から魚津にかけての海面が「ホタルイカ群遊海面」と呼ばれ、その中心が滑川である。毎年4月中旬から5月上旬にかけて、遊覧船に乗って定置網の引き上げを観覧するほたるいか観光は全国から訪れる観光客で活況を呈している。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【民俗】

	<p>《滑川のネブタ流し》…国指定重要無形民俗文化財</p> <p>毎年7月31日、眠気や穢れを託した大松明を海に送り出す行事で、夏越の祓や迎え盆との関連性も指摘されている。この種の行事としては、日本海側南限で地域的特色を持つとともに、古い形を今に残す貴重な行事である。</p>
	<p>《加島町獅子舞》</p> <p>明治期に能登通いの船によって高岡方面から伝えられたという伝承がある。加島町二区は雌獅子、加島町三区は雄獅子で、以前は一緒に奉納されていたが、戦後以降は1年交代で奉納されている。</p>
	<p>《こどもやさこ》</p> <p>春例大祭の日暮れ、櫛原神社より還幸される際、子どもの「やさこ」を先導に、神官、伶人自丁、宮役員等、供奉雅楽を奉し、賑々しく還幸される。</p>
	<p>《浦安の舞》</p> <p>春例大祭に神前に奉納される。</p>
	<p>《まつりの花》</p> <p>春例大祭の際に、氏子各家では「花」と呼ばれる紙や短冊を竹の枝に吊るし、軒先に飾る。一説によると、元々加賀藩の風習であり、残っているのは滑川の旧町部のみと考えられ、神様が通る道を清め、また花の下をくぐる人々を清めるためといわれている。</p>
	<p>《茅の輪くぐり》</p> <p>6月と12月の晦日に行われる除災行事である大祓(おおはらえ)で、全国各地の神社で行われる。滑川では夏越祓(なごしのはらえ)行事の一つとして、7月31日にネブタ流しとともに櫛原神社にて茅の輪くぐりが行われる。</p>




	<p>《滑川売薬》</p> <p>享保18年(1733)、高月村の高田千右衛門が富山の松井屋源右衛門から「反魂丹」の製法を習い受け、反魂丹屋千右衛門と名乗り製造販売したのが始まりとされる。現在も医薬品販売従事者数は富山市、射水市について第3位を占めており、伝統産業として引き継がれている。</p>
	<p>《古代神踊り》</p> <p>古代神は滑川の盆踊りとして知られている。県内では小大臣の名称でも親しまれており、立山町、上市町、旧大沢野町、五箇山地方などでも踊られている。『滑川町誌』には、かつて町部町では松坂踊りが踊られていたと記されている。</p>

【建造物】

	<p>《養照寺本陣（上段の間）》…市指定文化財</p> <p>養照寺は江戸時代後期から藩主の休憩・宿泊施設である本陣を務めた。藩主専用の部屋である上段の間は、周囲より一段高くなっており、柱は黒部奥山から調達した材を使用したと伝えられている。</p>
	<p>《城戸家住宅主屋》…国登録有形文化財</p> <p>江戸時代後期から味噌醤油の醸造業などを営んでいた商家で、明治初期に再建されたもの。良質の材や銘木を用い、1階前面に造り付けの帳場を持つミセ構えが良く残っている。</p>
	<p>《廣野家住宅主屋》…国登録有形文化財</p> <p>大正3年建築。大工は滑川の堂宮大工で、当時全国的に活躍していた岩城庄之丈が設計した。外観は繊細な出格子と、寺社建築に見られる深い軒が特徴で室内は数奇屋風の書院造りとなっている。</p>
	<p>《廣野医院》…国登録有形文化財</p> <p>昭和7年に建てられた洋風木造2階建の医院。正面側のみモルタル仕上げ。内部は白漆喰で洋風の意匠がふんだんに用いられ、昭和初期の様式をよく表している。</p>


	<p>《小沢家住宅店蔵》…国登録有形文化財 明治時代後期の建築。呉服商を営んだ商家で、黒漆喰壁、観音開扉をもつ重厚な土蔵造である。棟の剣型雪割瓦や正面のむくり屋根の下屋が特徴。</p>
	<p>《旧宮崎酒造》…国登録有形文化財 店舗兼主屋は、旧北陸街道沿いに面して建つ平入り町家で江戸時代末期の建築。酒蔵と麴蔵は明治時代中期の建築、衣装蔵は明治期の建築である。平成21年に復元された。</p>
	<p>《田中小学校》 昭和11年5月に落成した県内に残る数少ない木造小学校の一つ。当時は県下随一の設備を誇った。玄関のガラス引き戸や中央階段の親柱などにモダニズムのデザインが見られる。</p>
	<p>《櫛原神社》 延喜5年(927)に完成した「延喜式」神名帳に「櫛原神社」と記載されている。古くは滑川・中川原・辰野・柳原に広大な社地を有し、江戸時代に現在地に移ったと伝えられる。境内東角に金毘羅社がある。</p>


【史跡】

	<p>《有磯塚(句碑)》…市指定文化財 松尾芭蕉の70回忌に、滑川町の川瀬知十が中心となり、有志とともに徳城寺境内に建てられたもので、「早稲の香や わけ入右はありそ海」と自然石に刻まれている。この句が刻まれた石碑は県内に10基以上あるが、建立年がはっきりしていて最も古いものがこの句碑である。</p>
	<p>《一里塚》…市指定文化財 旧北陸街道の一里塚は、正保年間(1644~1648)に23基構築されていたことが判明している。県内において江戸時代初頭から残る一里塚は3ヶ所だけだが、そのうちの一つがこの一里塚である。</p>
	<p>《常夜灯》…市指定文化財 櫛原神社東角の金毘羅社入口で旧北陸街道に面して建つ。文化12年(1815)に滑川の有力町人川瀬屋が寄進したもので、保存状態も良好である。</p>

	<p>《立山・大岩道しるべ》…市指定文化財 江戸時代に全国から集まる立山・大岩山参詣者の道案内となっていた道しるべで、本来は旧北陸街道と五百石往還の分岐点に建てられていたものと考えられる。</p>
	<p>《芭蕉句碑》 櫛原神社境内の池畔にたたずむ石碑で、「しはらくは 花のうへなる 月夜かな」と刻まれている。安政2年（1855）に滑川町の俳人4人によって建てられた。</p>
	<p>《相撲力士の碑》 市内には力士の碑が確認されるだけで14基あり、かつてこの地で地方相撲が盛んであったことがしのばれる。市内最古の碑は明治5年（1872）に建立された車川傳吉親方の碑である。</p>
	<p>《和田の浜古戦場碑》 史実かどうかは不明だが、『滑川町誌』には「和田の田中（でんちゅう）に古塚数個の残存せるは、全く此時の戦死者を埋葬」したものと記され、和田の浜で戦いがあったとしている。</p>
	<p>《高月古戦場碑》 康永4年（1345）、南朝方についた越中守護・井上敏俊清と北朝方の能登守護・吉見頼隆が高月と滑川で激突した。井上敏俊清は最初の松倉城主といわれる普開門俊清と同一人物であるとみられている。</p>
	<p>《滑川の俳諧と青山百爾（あおやまひやくじ）》 江戸後期、滑川の俳壇をリードした青山百爾が亡くなったときに門人21名によって建てられたのが常盤町東側に残る句碑で「見て居れば おはれかゝるや 夜の花」と刻まれている。</p>

【工芸品】


	<p>《加積雪嶋神社「みこし」》…市指定文化財 滑川町の堂宮大工・岩城庄之丈が、京都伏見稲荷神社の神輿を参考にして明治23年（1890）に完成させたもの。制作には井波の彫刻師なども加わり、全体に技巧を凝らした美術工芸品と言える。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------





	<p>《梵鐘》…市指定文化財 室町時代中期に制作されたと伝わる優品で、戦時中も供出から除外されたものである。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------

【偉人】

	<p>《岩城庄之丈》 江戸時代後期から大正時代にかけて、滑川はもちろん全国で活躍した横町の堂宮大工の家に生まれた。東本願寺再建時に建築肝煎役を務めた人物である。</p>
	<p>《長谷川喜十郎》 「越中の左甚五郎」とも称された10代長谷川喜十郎は、数々の仏像や神像、河南神社・八坂社・加茂社の御輿を制作しているが、なかでも精巧な日光東照宮模型の制作によって明治から大正期に広く名が知られていた。</p>
	<p>《梅原眞隆》 寺家町の専長寺に生まれ、富山市などの仏教中学で学び、進学した仏教大学では学内一の秀才と謳われ、のち同校の教授として高い評価を受けた。昭和22年には参議院選挙に当選し、1期6年の在任中、戦後の教育行政に深く関係した。</p>
	<p>《高階哲夫》 山王町に生まれ、教員一家の養子になり、富山県師範学校を経て周囲の期待通り教職の道に就くも辞職。東京音楽学校へ入学してヴァイオリンを専攻する。卒業後は演奏活動を通して、ヴァイオリニストとしての名声を高め、その後は指揮者としての地位も確立した。代表曲として「時計台の鐘」（作詞・作曲）ほか。</p>
	<p>《高島高》 加島町に生まれ、旧制魚津中学校時代から詩作を始めた。日本大学の文科に進むも、父の願いを受け入れ中退。昭和医学専門学校に入学。卒業後は横浜で勤務医になるが、のち滑川に帰郷し、「北方荘」と名付けた自宅で創作活動を行った。</p>

【歴史資料】

	<p>《種ふくろ》…市指定文化財 滑川の俳人・吉田芳塙の俳諧日記。日々の出来事などに加え、自作の俳句8400余句や句会での記録などを書き記したもので、明治から大正期の滑川町の歴史や人物を知る上で貴重な史料である。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>《上杉景勝の「制札」》…市指定文化財 天正10年(1582)6月、上杉景勝が魚津城を奪回した後に櫛原神社に対して与えたものと考えられる。内容は社地内における乱暴狼藉を禁止し、治安維持を保障したものである。</p>
	<p>《河崎家文書》…市指定文化財 河崎家は江戸時代に滑川浦の手舟才許を務めた家。河崎家文書は、寛文5年(1665)から明治後期までの297点からなり、近世・近代の滑川浦方について知ることのできる貴重な史料である。</p>
	<p>《桐沢家文書》…市指定文化財 桐沢家は滑川町で御旅屋、本陣を務めた家で、町年寄をはじめとした重職を歴任した町の中心的な存在だった。本陣や役向きに関する史料が多く残されている。</p>
	<p>《滑川町惣絵図》 天明3年(1783)に作られたこの絵図には現在に近い道筋が描かれている。また、海岸には波除の矢来や石垣が築かれており、「寄り回り波」をはじめとした浪害と立ち向かってきた先人たちの苦労が偲ばれる。</p>

【その他】

	<p>《ほたるいかミュージアム》 単にホタルイカの生態的な情報を科学的に紹介するだけでなく、様々なメディアを駆使して、ホタルイカの神秘的に輝く青白い光をテーマに幻想的な感動も同時に体験できる施設。</p>
	<p>《タラソピア (深層水体験施設)》 深層水プールでの健康増進、タラソセラピー (海洋療法) など、海の恵みを体感できる癒しスポット。</p>
	<p>《アクアポケット (滑川海洋深層水分水施設)》 海底333メートルから深層水を汲み上げ、脱塩装置などを使って、脱塩水や高濃縮水など6種類の海洋深層水を提供する施設。</p>
	<p>《ふるさと龍宮まつり》 毎年7月の中旬に、ほたるいかミュージアムを中心に「新川古代神」・「海上花火大会」を柱とした、市民総参加によるまつりが繰り広げられる。</p>

	<p>《ランタン祭り》 ベトナムの「ホイアン」の町並と「ランタン（提灯）まつり」の雰囲気は瀬羽町の町の雰囲気に似ており、どちらもまちなみ保存の活動を行っていることから、新たなイベントとして開催されている。</p>
	<p>《橋場》 中川を挟んで大町と瀬羽町を結ぶ一帯が橋場。江戸時代には高札場が設けられ、河口は物資の積み出しや漁船の出入りする湊として賑わった。明治以降は警察署や町役場が置かれるなど、江戸時代以来人々の往来が絶えなかった繁華の地である。</p>
	<p>《滑川のまちなみ》 中川の両岸の晒屋と呼ばれる一帯は明治以降から戸数が急増し、商店街が形成されるなど賑やかな地域になっていった。この辺りが米騒動の舞台になった場所である。また、江戸時代から滑川の中心地であった瀬羽町は、明治時代以降も銀行や米問屋、各種店舗が軒を連ねた中新川の中心地として栄え、昭和になると「滑川銀座通り」という名称で非常に賑わった町である。</p>
	
<p>《富山県滑川町鳥瞰図絵》 昭和 11 年頃の滑川町を描いたもの。中新川郡の中心地として賑わった町の様子を知ることができる。</p>	

4 地域資源の連携についての方向性

江戸時代から明治、大正、昭和にかけての歴史的な街並みや史跡がモデル地域内に混在していることを踏まえ、特定の年代に固定せず「幅広く時代が交錯する町」をコンセプトとし、新たに芽生えつつある民間活力を最大限に生かしつつ、滑川の歴史と文化の薫りを市内外に幅広くPRすることで、滑川の誇りを次の世代にも伝える。

1. 学び、体験する（住民が誇りを持てるまちづくり）
2. 伝承拠点の整備（展示、体験）
3. 情報発信（市内外に向けたPR）

5 歴史と文化が薫るまちをつくる役者たち

- ・滑川宿まちなみ保存と活用の会

歴史的建造物の所有者が中心となって設立された会。北陸街道沿いにある歴史的価値の高い建造物や文化を保存、活用することを目的に活動を行っている。

- ・ネブタ流し保存会

毎年7月31日に眠気や穢れを託した大松明（ネブタ）を海に送り出す「ネブタ流し」を担う。ネブタの作成及び行事の承継に取り組んでいる。

- ・加島町（二区・三区）獅子舞保存会

加島町二区は雌獅子、加島町三区は雄獅子。現在は1年交代で加積雪嶋神社に奉納。獅子頭の保存と獅子舞及びお囃子の伝承に取り組んでいる。

- ・文化財ガイドボランティア〔仮称〕

滑川の街並みや文化財等を語り伝えるため、平成22年度から養成講座が開講。今後、修了生のガイドとしての活躍が期待される。